

ペットが食わらぬですか

鄭 雨所

「自分で飼っているペットが食わらぬですか。初めてこの質問を聞いた時、私はちよと迷いました。

子供の成長過程において、生命教育の重要性を軽視してはいけません。子供達に命の大切さを理解してもらうために、島根県のある高校では2017年から、「命」という授業が始まりました。

授業の内容は、セロから鶏を育てるということである。生徒達はそれぞれ自分の雛を飼うことになり、孵化から記録と観察を続けなければなりません。先生は最初から育てた雛は最後に屠って調理すると予告していただきました。

結局、その時になると、生徒達は大きな悲しみに襲われましました。そして涙をこらえながら、半年かけて育てた鶏を食べました。その中の一部の生徒は雛に名前さえ付けていました。

この授業の出发点は、生徒に生命の循環を

理解させ、同時にあげこの生物に敬意を持つ
 ことである。それは当然^にとても重要だと思いま
 す。が、「ペット」と「食材」の境界線があい
 まいになると思われたいです。両者の違いは、
 人々がそれぞれから得られるものです。ペッ
 トとして与えられるのは精神的な支え、それ
 に対して、食材が提供してくるのは、人間
 の体に必要な栄養素です。もし、両者の概念
 が違っていたらどうなるでしょう？

ある YouTuber がその概念を意図的に混同し
 ました。「100日後に食べられるブタ」という
 チャンネルが開設されました。カルビと言っ
 た子豚が主人公となり、その名前には少し皮肉
 が込められていることが見え、チャンネル名
 から、子豚の最後の運命も推測されます。

実は、このチャンネルの構想はかつて Twit
 ter 上で、一時的に熱い議論を巻き起こした
 千コ又漫画「100日後に死ぬワニ」から得た
 ものです。この漫画は元々著者の友人を追悼
 するために出版されたものです。「100日後

に「食べあめる豚」はこの作品の構成を真似て、
生まれました。

「カルビ」が「初日に家に着くと、飼い主は快適
な「ベッド」を準備し、決まった場所での排泄の
仕方も教えました。豊かな食事を用意してあ
げるだけでなく、海辺の散歩に連れ去った
り、また、病気になったことまの世話までし
ました。こんな心温まる日常をたくさん見た
後、人々は「カルビ」がもうすぐ殺さぬるという
事実をつい忘れてしまします。飼い主はそ木
を恐れていたように、時々テーブルにあらゆ
る種類の「ホークチョップ」を並べ、人々を現実
に引き戻しました。

残りのおか時間、飼い主は「カルビ」のた
めに誕生日パーティーをう行いました。また
自分の籍末を知らない「カルビ」と、その時点で
スクリーンを見つめていた視聴者は、おびて
に違和感を感じ、グロテスクに見えました。
緊張と不安、そして一抹の興奮さえも感じた
空気は、99日目に最高潮に達しました。

誰もが「カルビ」が「殺されるか」というのが緊張して見ていた時、作者は100目の動画をアップロードしました。しかし、みんなが待っていたのは、子豚の丸焼きのサムネでした。それを見た瞬間、コメントが殺到しました。ほとんどどの人は、自分の手で育てた豚を殺すなんて、想像できないことですが、少数の人は、これが命を尊重することを教えてくれたと感じています。これまで、この動画は420万回も再生されていきます。

しかし、鋭い観察力を持つ視聴者は、動画の最後に、注意深く見なければ見えない小さな文字の列を発見しました。「この物語はフックションです」みんなはまだ悲しみから立ち直れず、新たな議論の波が起こりました。

もし、カルビが死んでいないなら、動画の中で、ほかの子豚が丸焼きになったということでしょうか。そして、カルビと私達が普段食べている豚の違いが分からないという意見も

ありました。しかし、私から見れば、その差は非常に大きいと思います。

その違いは、感情のつながりが確立されているかどうかです。確立されると、世の中の無数の動物の中で、彼らは人類にとって、唯一無二の存在になります。それは、私達がカルビに対して同情する理由の一つです。いつの間にか、カルビとのつながりが確立されていることを示しています。

生命教育の本質は、私達が自分の持つつながりを認識し、そこから命を尊重する方法を学ぶことだと思われています。自分が飼っていた動物の死を悲しむ感情を、強制的に抑圧すれば、それは人間の本質に反するだけでなく、未熟な子供達に自分が大切にしているものは簡単に消せるものであると誤解させます。このような極端な教育方法を使わなくても、子供達に命の大切さを教える方法はたくさんあるはずです。

子供達を世界ともしっかりつながらせましょう。

その過程で、彼らは人生の正しい価値観を確
立することができました。自らの存在価値を不
切にすると共に、他の生き物の存在価値も尊
重し、調和のとれた生態系を築きました。